

詩人の商売

TRADE OF POET

中村 隆 詩集



蜘蛛出版社

詩集

詩人の商売

定価 一八〇〇円

一九八四年六月一〇日発行

著者 中村隆

発行者 君本昌久

発行所 蜘蛛出版社

神戸市長田区高取町一十一番二〇

郵便振替口座神戸一七二七六六

詩人の商売

詩人の商売

——中村 隆に

衣更着 信

詩人のする商売は金物屋がよい
ドギドギする出刃包丁や、美しい鋸の孤が並んでいる
合カギ複製機を据えて、その陰に
サギ師のように詩人がすわっている

（詩集「庚申その他の詩」季節社、一九七六年刊、所載）

詩集の表題は、畏敬する詩人衣更着信さんの
作品の題名を諒承を得て使用させて頂いた。

目次

I 取引その他の詩

取引	一九七二年	10
かくれんぼ	一九七二年	12
黒い鉄	一九七四年	13
篩	一九七八年	16
石頭	一九七八年	18
蝶番	一九七八年	20
幽霊	一九七八年	22
職業	一九八〇年	25
復活	一九八二年	28
アルミ・サッシ	一九八二年	30

Ⅱ 倒産その他の詩

倒産 一九七九年

強盗ごっこ 一九七九年

流れる街 一九八一年

消えた歯科医院 一九八二年

寡婦 一九八二年

寸劇 一九八二年

浮草 一九八三年

偽の海で 一九八四年

リモコン 一九八四年

34 38 42 46 49 52 56 59 61

Ⅲ 張り番その他の詩

夢の旅 一九七四年

張り番 一九七四年

遺書 一九七五年

アラモ 一九七八年

蛭 一九七九年

小伝 一九八一年

家系 一九八一年

ラグビー 一九八二年

桜 一九八三年

ギンギラ 一九八四年

Ⅳ 見えない球その他の詩

見えない球 一九七六年

眠れぬ腕 一九七六年

白い弾丸 一九七六年

勇士 一九七七年

理髪店にて 一九七七年

沈む球 一九八〇年

あとがき

112

109 107 105 102 100 98

I
取引その他の詩

取引

一塊の赤錆びた鉄鉾石に

火と 水と 力を加え

形なきものに

熱い息吹きを注ぎ込んだのは

人間の浅はかな知恵だ

永い企みの末

血を流す刃^や

火を吐く翼に

美の極致を見るのも

鉄のもつ悲しい宿命なのだ

いま

黒い肌を晒す菜切包丁と

鈍い光を弾く一本の出刃が

無造作に夕景の中へ取り出され

商品の影を床に落したまま

骨太の掌から掌へ

生まれたままの鉄の重さで

手渡されようとしている

鉄と人の

引裂かれた取引が始まるのは

それからだ

かくれんぼ

一五〇〇円 九〇〇円 二三〇〇円

赤い値札をたらし

いつせいに並ぶ

目玉商品

ささやかな資産

夏でも寒々とおれを威嚇する

名うての切れ者

店主が隠れたすきに

角の尖った鬼たちは

見知らぬ人に連れ去られたりする

黒い鉄

もう　あまり使うこともない

両端の尖った合釘や折釘

赤錆びた馬鋏ヒシツボやカスガイを手にとると

一本気で朴訥な明治人の肌ざわりがする

真赤に焼かれ　打ちのめされた

骨の節々が

暗い下積みの歴史を物語っているようだ

あるときは　鉄砲水に吞まれ

劫火に追われた

祖父や父の消え入りそうな声が

この変哲もない黒い鉄と鉄のあいだで
鈍い音を立てている

螺鈿らでんの厨子や 寺の塔頭たつあきに

牧場の柵や 堀立小屋の柱に

精巧に埋め込まれ

乱雑に叩きつけられた

名もない金物たちのいのちが

人生も日ぐれに近い齢になつて

いま おれの中で甦ろうとしている

強情で 粗野で 耐えることだけが取柄の

貧しい百姓の血が

時を超え ところを変え

華やかな道具の並んだ金物屋の店先で

ふいごのように
おれを焚きつけるのだ